新婦人創立40周年へ

今なお輝きつづける女性たち

第12回　大山柳子（1887～1987）

元新婦人東京都本部会長　**中村　美智子**

大山柳子さん自筆の花の絵はがき
てっせん

「大山柳子さんってどんな方？」と聞けば、「貴婦人のような人」という答えがかえってきます。色白でふくよかな頬はほんのりとさくら色。絹のようになめらかでやわらかい肌。

絵のなかの「貴婦人」が額から抜け出たかと思われる美しい人でした。

戦後間もない頃、会議を終えて新宿から高田馬場への通り道、歌舞伎町のホステスさんが「王女様よ」と言って店を飛び出してささやいたという風聞も残っている程です。

大山柳子さんは、一八八七（明治二〇）年神戸市の水野家に生まれました。

反戦・平和のたたかいを生涯貫ぬいた社会運動家の大山郁夫氏と一九歳で結婚、情熱的な郁夫氏のよき妻として、もの静かでおだやかだった柳子さんは郁夫氏とともに破乱の人生を歩みました。

一九三八（昭和一三）年、日支事変から、太平洋戦争へと侵略と暗黒の時代の深まるなか渡米していた郁夫氏のもとに行き、ともに米国で過ごしました。

米ノースウエスタン大学研究嘱託の郁夫氏でしたが結核に侵され療養の身でした。

柳子さんはたまたまゴッホ勉学のため渡米した画家矢部友衛氏（※）に師事、絵を習い、その特技を生かして生活のためガラス工場でコップや花瓶の絵つけ女工として働きました。

※矢部友衛（画家・日本美術会に参加「平和署名――農村から」油彩画を創作、モニュメントとして記録される）

矢部友衛氏から「筋が良い」「てもうま（上手）い」、また後年も柳子さんのバラの絵を「美しい、私にはとても描けない」と、絵の素質を認められた柳子さんの画家としての開花は苦渋を乗り切る生活の糧としての絵つけというひたむきさのなかで、一層磨かれ、画家大山柳子をつくり上げたのだと思われます。

またこの時代の経験を櫛田ふきさんは著書（櫛田ふき著『青い地球をもっと青く―新婦人創立のころの人びと』）のなかで、「柳子も昔の奥さまではなかった。立派に鍛えられていて、たびたびわたしの目をみはらせた」と書いています。そして、一九五〇年参議院に立候補（無所属・民主統一戦線）の夫・郁夫の応援で日雇い労働者を前に、絵つけ女工として働いた苦労話をして熱い拍手をうけた柳子さんのことを、「わたしは大山柳子さんを見直し、尊敬を深めたのだった」と書かれています。

米国でのガラス工場での経験は柳子さんを働く人の喜びや苦しみを共有できる行動の人へと成長させ、一九四七年帰国後、活動の道を歩み始めました。

一九五三年「世界婦人大会」がデンマークのコペンハーゲンでひらかれました。

全世界七〇カ国から代表六七三人が集まりました…　が外務省の旅券発行拒否のなかで、日本代表（羽仁説子、小笠原貞子、高田な

大山郁夫氏（真ん中）のレーニン平和賞受賞式に同行した柳子さん（右）

平和運動に活躍する画家・大山柳子さん

お子など一〇人）が到着した時は、大会は終わったところでした。しかしこうなることを予測して、松崎濱子さん（現新婦人顧問）が、レーニン賞受賞のため郁夫とともに渡仏される柳子さんに資料を渡し、日本代表として報告を行うことを依頼していたのでした。柳子さんは無事その任を果たされました。

世界婦人大会に出席した一〇人の代表は旧ソ連、中国など各国をまわり全国各地で報告、集まった女性たちは、三カ月間で、二〇〇〇カ所一〇万人を超えました。

一九五五年、郁夫氏の突然の死去、夫の遺志を継いだ柳子さんは、第一回原水爆禁止世界大会に東京の代表団として参加。一九六一年六月、日本平和委員会副会長に就任、七七年まで活動され、一九八七年まで顧問をつとめられました。

柳子さんは、この間アンデパンダン展にも意欲的に大作を発表し続けました。

平和を心から願った柳子さんは、新日本婦人の会のよびかけ人としても積極的に加わられました。そのことを櫛田ふきさんは「絵の描ける大山柳子は絵を描き、人形づくりなどして、新しく生まれた婦人組織を育てるため尽力した。結成大会当日、入場順に一番、一〇〇番、二〇〇番と一〇〇人ごとに大山柳子手作りの人形を記念に贈った…」（前述の著書）と書いています。こうして新婦人の発展、女性の進歩に心を砕かれた柳子さんは、自ら描かれた絵をしおりや、絵はがきに提供され、カンパ活動を支えてくださいました。山ぶどう、あやめ、しゃくやく、はげいとう、大好きなてっせんなど、色鮮やかな絵はがきを私は大切に保存しています。

しゃくやく

また九〇歳近くになられても新婦人東京都本部で「美について」のお話をして下さいました。

人物画、花を好んで画材にした柳子さん。晩年、目が御不自由になられた柳子さん宅を訪れた松崎濱子さんに「絵を描くためには、ムダなものが見えない方がよい…」といわれたそうです。松崎さんはこころに残る柳子さんの言葉として、自らの生き方に重ねられているといわれました。

柳子さんのお宅の鈴をならすと待つこと五分、髪をなでつけ、紅をつけ、乱れることなく装いをこらした柳子さんがあらわれたときます。

美しいものを見つめる感性の豊かさ、人前に乱れを見せない凛とした気品、

一九八七年、大山柳子さんは一〇〇歳の生涯を閉じられました。

新婦人四〇周年を迎えるいま、鈴をならすと美しく、しなやかで、したたかに生きる柳子さんの分身がいっぱい溢れることでしょう。

（なかむら・みちこ）

はげいとう